



「アップとルーズで伝える」

◎4年生で初めて扱う双括型の文章構成になっており、筆者は最初と最後の段落で主張を述べている。またより分かりやすくする工夫として様々なことが対比して書かれている。

〈本文で対比されている事例〉

『アップとルーズ』『テレビと新聞(映像と写真)』

『たくさんカメラと一台のカメラ』

◎既習の説明的文章「くちばし」「たんぼのちえ」「こまを楽しむ」「すがたをかえる大豆」の構成を復習することで頭括型・尾括型・時系列型との違いに気付ける児童が多く、比べることで「問い」が生まれるきっかけとなった。また同じ文章構成で展開されるプレ教材「思いやりのデザイン」を学習することで、双括型の良さ・段落における役割を意識できるようになってきている。

七段落の必然性を確かめるための発問

「七段落は必要か、必要ではないか」を問うことで、七段落が筆者の主張に関わる段落であることに気付いたり、段落相互の関係を考えたりするきっかけとなった。

◎Which型課題とは

「A or B」の形式の課題は意思表示がしやすく、どう感じたか、個人の解釈はどうか、根拠はどこかなど、考えて伝える内容が明確になる。

視点を改めて教材を読む

① 「読み手」の立場で読む

最初は「面白い」「すごい」「分からない」など、反応することから始める。反応を感想として表現し、問いを持ち、問いを作っていく。

② 「書き手」の立場で読む

書き手の視点でも読んでいくために、筆者の優れた書きぶり、事例の確かさ、題名のこだわりなどに気付けるようなゆさぶりをかけながら、学習をすすめていく。筆者の工夫を自分の文章に落とし込んで書くことをゴールとしている。

説明文での書き手の意識を育てる

活動例

- ① 対象の段落を抜いた教材と元の文章を読み比べる
⇒文章の分かりやすさが上がる、筆者の意図が読み取りやすくなる
- ② 段落の順番を変えて読む
⇒文章構成を考えるきっかけになる
- ③ 題名の意味に立ち返る
⇒書き手の気持ちを想像しやすくなる